

和解に至る苦しみ

[聖書] 創世記 33章 1～11節

ヤコブが目を見ると、エサウが400人の者を引き連れて来るのが見えた。ヤコブは子供たちをそれぞれ、レアとラケルと二人の側女とに分け、側女とその子供たちを前に、レアとその子供たちをその後に、ラケルとヨセフを最後に置いた。ヤコブはそれから、先頭に進み出て、兄のもとに着くまでに七度地にひれ伏した。エサウは走って来てヤコブを迎え、抱き締め、首を抱えて口づけし、共に泣いた。やがて、エサウは顔を上げ、女たちや子供たちを見回して尋ねた。「一緒にいるこの人々は誰なのか」「あなたの僕であるわたしに、神が恵んでくださった子供たちです。」ヤコブが答えると、側女たちが子供たちと共に進み出てひれ伏し、次に、レアが子供たちと共に進み出てひれ伏し、最後に、ヨセフとラケルが進み出てひれ伏した。エサウは尋ねた。「今、わたしが出会ったあの多くの家畜は何のつもりか」ヤコブが「御主人様の好意を得るためです」と答えると、エサウは言った。「弟よ、わたしのところには何でも十分ある。お前のものはお前が持っていなさい。」ヤコブは言った。「いいえ、もし御好意をいただけるのであれば、どうぞ贈り物をお受け取りください。兄上のお顔は、わたしには神の御顔のように見えます。このわたしを温かく迎えてくださったのですから。どうか、持参しました贈り物をお納めください。神がわたしに恵みをお与えになったので、わたしは何でも持っていますから。」ヤコブがしきりに勧めたので、エサウは受け取った。

[序] 叔父の家に居られなくなったヤコブ

先週は、アブラハム、イサクに続く三代目のヤコブが、人生のどん底で見た素晴らしい夢について学びました。彼は目が見えなくなった父を騙して、家督を継ぐ祝福の祈りを横取りしました。出し抜かれた兄エサウがヤコブを殺す決意を固めたので、母リベカはヤコブを800キロ離れた自分の実家に逃避させなければならなくなりました。彼は杖一本を頼りに旅立ちました。荒野で石を枕にして地面に横たわり、野宿しました。テントもマットもなく、そばに居てくれる従者もいない、全く孤立無援な状態でした。身の危険に怯えて、どんなに心細かったことでしょう。

ところが彼は、天に達する階段が地にまで伸びてきて、神の御使いたちが上ったり下ったりしている夢を見たのです。天に通じる祈りの階段です。神さまが祈りの階段を下りてきて、彼の傍らに立ち、声をかけて下さいました。「見よ、わたしはあなたと共にいる。あなたがどこへ行っても、わたしはあなたを守り、必ずこの土地に連れ帰る。わたしは、あなたに約束したことを果たすまで決して見捨てない」。ヤコブは独りで必死に祈ったのです。そして祝福の約束をして下さる神さまの語りかけをはっきり聞き取る霊

的体験をしたのでした。

彼はその夢を信じました。そして約束を心の支えにして、遠く離れたハランに行き、母の実家に身を寄せました。実家は母の兄ラバンの代になっていました。ヤコブはそこで20年働きます。ラバンはヤコブ以上にしたたかな人物で、騙され続けますが、神さまの守りで、財産を増やしていきます。それを従兄弟たちが嫉んで、財産を横取りすると騒ぎ立てるので、彼はラバンのもとに居れなくなりました。何処へ行けばよいのか？カナンに戻るより外ありません。

しかしカナンには、かつてヤコブを生かしておかないと息巻いた兄のエサウが居ます。どうしたら仲直りしてもらえるでしょうか。ここからが今日の学びです。

[1] 夜通しの格闘

ヤコブは使いの者をエサウのもとに派遣しました。エサウが供の者を400人連れてやってくるという報告が入りました。ヤコブは非常に恐れ、思い悩み、祈りました。「どうか、兄エサウの手から救ってください。わたしは兄が恐ろしいのです。兄が攻めてきて私をはじめ母も子供も殺すかもしれません。あなたはかつてこう言われました。『わたしは必ずあなたに幸いを与え、あなたの子孫を海辺の砂のように数えきれないほど多くする』と」(32:12)。

ヤコブは兄への贈り物を沢山用意しました。山羊220匹、羊220匹、ラクダ30頭、牛50頭、ロバ30頭を三つの群れに分け、群れと群れの間の距離をとり、時間をかけて一群れ、また一群れと贈り物がエサウに届くように仕組みました。二人の妻と側女たちと11人の子供も三組に分けて、順に行進させて400人の供を連れてエサウに会う段取りをしました。

準備は整いましたが、果たして計画通りにうまくいくのでしょうか。ヤコブはヤボク川の手前に独り留まって、何者かと夜通し格闘をしたのでした。彼は腿の関節がはずれてびっこになりますが、「祝福してくださるまで離しません」といって相手にむしゃぶりついて離れませんでした。そして「お前の名はもうヤコブではなく、これからはイスラエルと呼ばれる。お前は神と人と闘って勝ったからだ」という祝福を頂いたのでした。すると夜の闇は明け、太陽が昇りました。

ヤコブはヤボクの渡しを渡り、群れの先頭に立ちます。エサウが400人を引き連れてやって来ました。ヤコブは七度地にひれ伏してエサウを迎えました。エサウは走って来てヤコブを迎え、抱き締め、首を抱えて口づけし、共に泣きました。兄が無条件で仲直

りしてくれたのです。その上「弟よ、わたしのところには何でも十分ある。お前のものはお前が持っていなさい」と言ってくれました。「いいえ。もし御好意をいただけるのであれば、どうぞ贈り物をお受け取りください。兄上のお顔は、わたしには神の御顔のように見えます。」

ヤコブはつい今朝方太陽が昇るまで、一晩中何者かと格闘をしました。そのお方は名前を聞いてもおっしゃいませんでした。しかし「お前はこれからイスラエルと呼ばれる」と祝福の言葉を語って下さいましたから、神さまに違いありません。杖一本でハランに出発した時、野宿した荒野で祝福の約束をして下さった神さまが、20年後にこうして戻ってきた時に、もう一度祝福して下さいましたのです。恐ろしさに震え上がった心に平安が与えられ、兄の前に進み出ることが出来たのでした。ヤコブは和解してくれたエサウの穏やかな笑顔に、御顔を見ることなしに夜通しむしゃぶりついていった神さまの御顔を、はっきりと見る思いがしたのでした。

ヤコブが伯父のもとから、自分の蓄えた財産を持って逃げ出した時、ラバンは一族を率いて7日の道のりを追いかけて来ました。神さまは夢の中でラバンに現れて、「ヤコブを一切非難せぬよう、よく心に留めておきなさい」とお命じになっています。そこでラバンは穏便にヤコブをカナンに帰らせました。それと同じように神さまは、エサウの心にも語りかけて下さっていたのでしょう。だからエサウも走りよって抱き締めてくれたのです。神さまは独りヤコブだけにではなく、ラバンやエサウにも働きかけて、ヤコブの歩みを守り導いて下さったのでした。

[2] 自殺に追い込む心の闇

多くの日本人に読まれている夏目漱石の小説「こころ」は、彼が死ぬ2年前の47才の作品です。高校の国語の教科書にも取り上げられているそうですね。主人公は下宿している自分の隣の部屋に、子供の時から仲の良い友人 K をしばらくおいてやることにしました。やがて K は、下宿の娘が好きになったと主人公に打ち明けました。すると主人公はそれまで煮え切らなかったのに、下宿の奥さんに「お嬢さんを私に是非ください」と申し出て、娘との縁談をさっと取り決めてしまいました。

彼は友人を出し抜いた自分の狡猾さに、気が咎めます。K に告白して詫びなければと内心で強く思いましたが、彼の自尊心がそれを許しません。迷っているうちに K は突然彼の隣の部屋で、首の動脈を切って自殺してしまいました。詫びる機会が永久に失われてしまいました。彼はそのまま結婚しましたが、K の面影が彼をおびやかします。

彼が叔父に騙されて財産の大半を横取りされた時は、人の頼りにならないことをつくづく感じましたが、この自分は立派な人間だという信念がどこかにありました。しかし K への自分の仕打ちから、自分も叔父と同じ人間ではないかと意識した時、自分で自分に愛想がつきて、身動き出来なくなりました。妻に打ち明けて心を楽にしようと思いますが、自分以外のある力が不意に現れて、彼を押さえつけます。自分のようにずるい事をした人間は、幸福になってはいけないという思いが彼を締め付けて、身動きできない無気力さに引きずり込んでしまいます。

そのうちに恐ろしい影が胸のうちに閃くようになりしました。そのものすごい閃きは、生まれた時から、胸の底に潜んでいる人間の罪だと感じるようになります。誰からも切り離されてたった一人で居るような孤独感、生への前進をぐいと握り締めてぐたりとさせてしまう虚無感が、彼を自殺へと追いつめて行きました。

こうして告白できないために苦しんだ主人公は、遂に遺書の形で告白し、妻には決して見せぬことと書き添えて、自殺してしまいます。心の一番深い所にある思いを共有して、支えることの出来なかった奥さんの孤独感も、どんなにか深かったことでしょうか。やりきれない思いにさせられる作品です。

ヤコブも兄エサウの怒りをなだめて赦してもらおうとして、持ち合わせた知恵を働かせて周到な対策を立てました。そして全てが動き出す時に至って、彼の心の内が、深い闇で覆われる思いで一杯になりました。彼は一晩中格闘します。彼の心にずーっと付きまどって離れないエサウの呪い・騙された者の呪い、或いは復讐に対する怯え・恐れと格闘したのでしょう。お前はずるい人間だ。幸せになる資格などないと自分を責める声・後悔の念と格闘したと言うことも出来ると思います。

しかし一方では、彼はそのような時に、むしゃぶりついて格闘する相手、神さまを心に持っていたのです。そして絶望の淵に引きずりこまれてしまう瀬戸際で、びっこにされる痛手を負いながらも、祝福を勝ち取ることが出来たのでした。名前を変えるとは、人間の変化を意味します。前に行く者のかかとを掴んで離さない男ヤコブが、イスラエルと呼ばれるようになっていったのでした。そうです。ヤコブ以降、ユダヤ人は神さまを信じる自分たちをイスラエルと呼ぶようになりしました。ヤコブは人間的に大きく成長していったのでした。

[結] 「こころ」を大切にする

ヤコブはたった一人で荒野に横たわる人生のどん底で、神さまが祈りの階段を下りてきて、そんな自分の傍らに立ち、語りかけてくださる霊的体験をすることが出来ました。

その時に聞き取った神さまの言葉を心の土台に据えて、それからの人生を歩み始めました。

それから20年。殺すと言われて逃げ出した兄エサウの許へ戻って行く日が来ました。殺されるかも知れないという恐怖が、強烈に襲って来ました。心が闇で閉ざされました。しかしこの時にもヤコブは、一晩中神さまにむしゃぶりついて格闘し、ついに光の中に身を置くことができました。

「騙すより、騙される人になれ」とよく言われます。ヤコブは20年たっても、いざエサウの許に帰らねばならなくなると、これほど怯え、苦しんでいます。夏目漱石の「こころ」の主人公は、遂に自殺してしまいました。私たち人間が持ち合わせている「こころ」が引き起こす狂った行動が、あちらでこちらで毎日悲劇を生み出しています。

私たちは人の間で生きている人間です。人間関係抜きにして人生はありません。その人間関係は、「こころ」と「こころ」のつながりです。「こころ」を大切にしなければなりません。「こころ」が傷ついた時に、どのようにして癒しますか。人と和解する・自分と和解することは、私たちにとっては、本当に難しい課題です。

ヤコブが私たちに証しています。「こんな自分でも、生き抜くことが出来ました。神さまとつながっていたからです。人生の大事な場面で、素晴らしい夢を見ることが出来ました。一晩中格闘することが出来たからです」と。

祝福を約束してくださる神さまを信じるのが、人生の明暗を分けます。私たちはアブラムをアブラハムにし、ヤコブをイスラエルに変えて下さった神さまを信じて、生き抜いていきたいものです。

完